

第55回中学生作文コンクール

優秀賞

両親からの最高のプレゼント

岐阜県 岐阜大学教育学部附属中学校 二学年

廣西 彩乃

「ミンミンミンミンミン」

私の自宅近くに、けやきの木がたくさん植えられている、けやき通りがある。夏になるとその木にとまっているたくさんの蝉が元気よく鳴く。この鳴き声を聞く頃、母と私の恒例の会話がある。

「夏が来たねー。」

「そうだねー。」

お互い少し汗をかき笑顔で夏を感じる。そんな他愛もない会話に幸せを感じる。よく見かけるアブラゼミは、幼虫として地下に約六年、成虫として地上に出てきて約一週間程度で一生を終える。私は思う。アブラゼミは、自分の最期を地上に出てきた残り一週間で気付くのではないだろうか。そのため、残りの命をかけて全力で鳴き、後世にバトンタッチをしていくのだと思う。人間はいつその日が訪れるか分からない。もしもその日を知っていたら、徐々に準備をする事ができるのだろうか。

そんな事を考えながら、今年の夏は母と生命保険について話し合いをした。母は一枚の保険証券を目の前に置き、いつになく真剣な眼差しで私を見つめて話し始めた。

「これ、あなたの保険証券よ。」

少し厚い紙に難しい言葉で色々と書いてあった。どうやら、私が二歳のときに加入したものらしい。母に言う事ができなかったが、私は正直驚いた。二歳で加入って早いのではないか。もしかして、私は早く死んでしまうのだろうか。そんな不安な気持ちで、母の説明を聞いた。

母は私に分かりやすく丁寧に説明してくれた。保険の種類、保険の内容、特約について、私が理解できるまで説明してくれた。保険証券に書かれている内容はもちろん、加入した理由を聞き、少し目頭が熱くなった。両親は、はじめての子供を抱き、この子はどんな人生を歩むのかを想像していたそうだ。本が好きになってほしいという思いから、絵本の読み聞かせをし、運動をする事が好きになってほしいという思いから、よく公園で遊んだらいい。しかし、何より一番に考えたのが、健康で明るく過ごしてほしい、そしてやりたい事をやってほしいということだったそうだ。その結果、私も生命保険に加入させて、万が一何かあったときに困らないようにしたと教えてくれた。その事が理解で

第55回中学生作文コンクール

きたとき、私の抱いていた不安は解消され、両親への感謝の気持ちが生まれた。もしも宝くじが当たったら。もしもあと十五センチ背が伸びたら。と考える事は、夢があるため楽しく未来を考えられる。逆に、もしも病気になるたら。もしも事故をしてしまったら。と考える事は、寂しく、未来を考える事が億劫になると思っていた。しかし、母の話を聞き、生命保険の大切さを知るとそんな思いは払拭され、逆に将来のライフプランを考える上で、生命保険は必要不可欠なものだと理解でき、明るく考えられるようになった。

今の私は幸せだ。私は今まで、家族みんなが笑顔でいるから幸せなのだと思うていた。もちろんそれもあるが、その裏では、両親が家族のライフプランをしっかり考え、もしものときでも、笑顔で生活できるよう、必要に応じた生命保険に加入をしてくれていたから、今の私は幸せな生活を送れているのだという事が理解できた。私は少し照れくさかったが、そんな幸せを与えてくれた両親に、少しでも長生きしてもらいたいという思いを伝えた。

ふと耳を澄ますと、心地よい風が吹き、カーテンの隙間から聞こえる蝉の鳴き声が私を穏やかな気持ちにさせてくれた。母を見ると、笑顔でキッチンに立っていた。